

## 卒業論文題目からみた近代歴史学の歩み： 東京帝国大学国史学科1905－1944の事例報告

佐藤雄基

本稿は、第二次世界大戦前および戦時期における東京帝国大学の国史科（国史学科）卒業論文の題目に関する事例報告である。

2017年3月10日に立教大学池袋キャンパスで開催された公開シンポジウム「史学科の比較史：草創期から1945年」において、筆者は「東京帝国大学における史学と国史：史料編纂事業との関わりと卒業生進路から」と題する報告をおこなった。このシンポジウムをもとにして、小澤実との共編で『史学科の比較史』（勉誠出版）という論文集の刊行を準備しており、拙報告は同論集にて活字化を予定している（以下、同論集に掲載予定の拙稿を【別稿】とする）。【別稿】では、①古代・中世・近世という時代区分に基づく教育体制への転換が、1920年代の教員の世代交代（中世史の平泉澄、古代史の坂本太郎）にともなって進んだこと、②戦前の教育研究体制では明治以降の歴史（いわゆる日本近代史）は対象とされていなかったが、卒業生の就職先などをみると、前近代史で卒業論文を書いた卒業生が、就職先の業務の一環としてオン・ザ・ジョブで近代史研究を始める事例が多く、大正期以降になると幕末・明治期を卒業論文の対象とする事例も僅かながらあらわれていること、就職先で近代史研究を始めた卒業生を講師として呼ぶ事例も出ていること、などを指摘した。

こうした議論の基礎データとなる戦前・戦中の卒業論文の題目については、1905年の『史学雑誌』16編以降、毎年の論文題目が「彙報」に掲載されている（以下「彙報」）。【別稿】では各年の卒業生数とともに、便宜上時代別に分けて表（【別稿】中の【表3】、本稿では【表B】）にまとめたが、紙幅の都合上、どの論文をどの時代に分類したのか、表の根拠となるデータを示すことができなかった。そこで本稿では、氏名と卒業論文題目、時代の分類を記入したデータ【表A】<sup>(1)</sup>を提示するとともに、幾つかの史学史上の論点を提起することにしたい。

大学史・学問史は教員・研究者を中心に描かれる傾向がある。これに対して、本稿では学生に焦点をあてて、卒業論文から何がみえてくるのか、ということに焦点をあてる。そうした作業を通して、歴史学（国史学）を学んだ卒業生という人間集団がどのような知的傾向を有し、その傾向がどのような時期的変遷をみせるのか、集団人物誌的アプローチ（プロソポグラフィ）による史学史研究の方法を試みたい。そのような視点をもつことによって、『史学雑誌』をはじめとする学術雑誌の彙報欄を史学科コミュニティの史料として活用する試みもまた、本稿のもう一つの狙いである。中長期的には史学科（国史学科）卒業生エンサイクロペディアのようなものが作成される必要を感じるが、ひとまず本稿では卒業論文の題目に注目した。

なお、【表A】は卒業年を示す。東京帝国大学文科大学国史科は1889年（明治22年）に設置され、1904年には国史科・史学科が統合されて史学科に改組された（史学科国史学専修）。翌1905年7月の卒業生から卒論題目が彙報に記載されるようになる。1918年（大正7）7月までの卒業生は東京帝国大学文科大学史学科（国史学専修）、1919年7月の卒業生は東京帝国大学文学部史学科（国史学専修）、1920年7月からの卒業生は東京帝国大学文学部国史学科の卒業となる。1920年ま

では7月卒業で、1921年からは3月卒業である。通常の年限で卒業できた最後の学年は1941年3月卒業までで、徴兵猶予の短縮にともなう修業年限の短縮により、1942年3月卒業予定だった学年は3カ月短縮されて1941年12月卒業、1943年3月に卒業予定だった学年は6カ月短縮されて2年半の就業年数で1942年9月卒業となった（以下43年9月・44年9月卒業）。但し、高等学校の就業年数が3年から2年半に短縮された関係で、45年9月卒業の学年は3年の就業年数に戻っている<sup>(2)</sup>。「彙報」における順番は、「順不同」としたり、「五十音順」としたりと基準が明確ではないが、ひとまず「彙報」の配列に合わせた<sup>(3)</sup>。

【表B】では便宜上、古代から近代までの時代に分類した。院政期は中世、織豊期は中世として数え、幕末は近世とは別に立項した。卒業論文の題目のみで時代を分類したので正確性に欠けるところがあるが<sup>(4)</sup>、おおよその傾向は分かると思われる。1927年まで年平均7人弱だが、1924年7月の改正による文学部入学定員の増加の結果<sup>(5)</sup>、1928年以降年平均23人強名と大幅に増加する。27年までとそれ以降で分けると以下の通りである（但し(5)で後述するように卒業論文数であり、卒業生数ではないことに注意）。

1905年～27年（合計156本） 古代38、中世70、近世40、幕末4、未詳4

1928年～44年（合計418本） 古代107、中世123、近世155、幕末25、近代5、未詳3

【別稿】でも述べるように、昭和初期には教員の世代交替と学生数急増とがあいまって、史料編纂所と人的にも深い関係のもとにあった明治・大正期のあり方から、国史学研究室を中心とする体制へと変化した。平泉澄が国史学科の主導権を握る背景には、こうした変化があった。

### (1) 卒業論文で近代史を選ぶこと

管見の限り、史学史の研究において卒業論文の題目・時代別の傾向性を本格的に検討したものはないようである。個々の大学史において、ある年度の卒業論文の題目がサンプル的にとりあげられることはあるが、ある一定期間の卒論題目を網羅的に取りあげて分析したものは見つけられなかった。ただ、大まかな傾向性として、現在と近い時代は歴史研究の対象とされにくい傾向があり、徐々に新しい時代が研究対象となっていくというイメージは共有されていると思われる。戦前の東京帝国大学に関しては、日本近代史研究の開拓者となった大久保利謙が『日本近代史学事始め』において「明治維新以後のあたらしい時代は歴史家がタッチすべきものじゃないという、鉄則みたいなものが存在していた。だからわたしも卒論では幕末史にふれていない」<sup>(6)</sup>と回想していたように、明治維新後の近代史を学べなかったというイメージが流布している。永原慶二「東大国史学科戦前学生の卒業論文：『20世紀日本の歴史学』余録」は、「学生文庫」のガリ版刷『国史学科卒業論文題目一覧』を用いて、1941年以前「明治以降」「近代」を卒論のテーマとしたのはマルクス主義歴史家の井上清のみであったと指摘する<sup>(7)</sup>。近現代史を教育・研究の対象にすることができなかったことは、同時代の「国家」に対する近代歴史学・歴史教育の無批判的なあり方と表裏一体であったと永原は考えていた。

確かにそのような側面があったことは否定できない。だが、その一方で、大正期以降、明治を歴史研究の対象としようとする萌芽的な動きは確かに存在していたことも無視し得ない<sup>(8)</sup>。明治時代を対象とした卒論は1936年の井上清「近代兵制に関する一研究——特に陸軍を中心として——」を嚆矢とするが、1936年以降1944年まで毎年幕末・近代の卒論がでていることに注目したい。近代史を対象とする卒業論文は井上以降、以下5名がいる（1942年以降は永原の議論の対象外）。

1938年3月

上杉重二郎「我國に於ける立憲政治の確立について」

村野守次（守治）「西南戦争の研究」

佐々木恵眞「明治初期に於ける外交」

1940年3月

浅石晴世「明治初期に於ける唯物論的世界觀の史的考察」

1942年9月

佐々木鋭市「近代陸軍の成立について」

このうち上杉重二郎は、天皇主権説を説く憲法学者上杉慎吉の次男で、共産党員であった<sup>(9)</sup>。近代政治史の開拓者のひとりとして、戦後『帝國議会の歴史と本質』（岩波書店、1953年）などを刊行したのは、ドイツ近代史研究に転じ（『ドイツ革命運動史』青木書店、1969年など）、1965年からは北海道大学教育学部（教育史学講座）に勤めた。浅石晴世は卒業後、中央公論社調査室につとめ、1943年の横浜事件に連座・逮捕されて獄死している<sup>(10)</sup>。平泉澄の影響下にあったことが強調されがちな戦中の国史研究室において、唯物論をテーマにして卒業論文を執筆した学生がいたことは注目される<sup>(11)</sup>。

村野は鹿児島出身で、戦後は鹿児島女子短期大学教授となって鹿児島の地域史や西郷隆盛研究で知られることになるが、卒業後は文部省維新史料編纂事務局に勤務していた<sup>(12)</sup>。古代・中世史で卒論を書いた人物が、就職先の業務として近代史研究を行うというパターンが一般的であったのに対して、卒論と就職が連動するケースも現れ始めていたことも注目される。

なお、本稿の対象外であるが、終戦後1946年9月には高橋昌郎が「福沢諭吉研究」を執筆している。高橋は卒業後、東京都立北園高等学校の教員を経て、清泉女子大学教授となっている<sup>(13)</sup>。数からいえばなお僅かであるが、戦後の日本近代史研究の萌芽は、昭和初期に確かに生まれており、戦後につながっていくのである。

## (2) 時代区分について

時代区分に関していえば、【別稿】でも述べるように、1918年の平泉澄の卒業論文「中世に於ける社寺の社会的活動」が、東大国史卒論題目で「中世」を用いた初見である。平泉が1925年に「中世史」講義を始めてから時代区分を用いた題目が増加する<sup>(14)</sup>。研究テーマをみても、1929年の橋本實「中世に於ける武士道の研究」や1930年の宝月圭吾「中世に於ける起請の研究」などのように、文化史・思想史・外交史など、政治史にとどまらないテーマに広がっていた。その際に「中世」のような時代区分は便利だったのであろう。

古代史の表記としては、「古代」「上代」の両方が使われていたが、1929年以降「上代」が選択される傾向が強まる。平泉の着任後、黒板勝美が「上代史」を中心に講義を行うようになったことが係わる可能性がある。「近世」に関していえば、花見朔巳（1906年卒）の「奥州近世史」の例が突出して早い。コンスタントに用いられるようになるのは昭和初期である（1927年卒の村田貞雄以降）。当時平泉に心酔していた末松保和は「できるだけ古い史的イメージを使わないで、新しいイメージを使いたい」ので、江戸時代ではなく近世という言葉を使う傾向があったと回想している<sup>(15)</sup>。

古代・中世のなかの時代区分に関していえば、鎌倉時代、戦国時代、奈良朝、平安朝（「王朝時代」）のように、政権所在地による時代区分が多い（黒板勝美の影響か）。江戸時代か徳川時代か

はどちらもある。室町時代に関していえば、1906年の町田尚政「室町時代に於ける漢文學の發達」があるが、1935年の平久保章「〈足利時代に於ける〉五山禪僧の活動」のように足利時代という呼称も登場する。

南北朝時代に関していえば、1909年の篠田周之「南北朝合一以後に於る伊勢國司家」のように「南北朝」呼称が一般的だったが、1922年の楠田覺眞「本願寺覺如を中心とした鎌倉後期南北朝前期の眞宗」を最後にして題目からは消える。1938年の遠山茂樹<sup>(16)</sup>「吉野時代に於ける武士勢力の趨勢」や1940年の宮地治邦「攝津住吉神社の研究——特に吉野時代を中心として——」のように戦時期の国史研究室では「吉野時代」呼称が用いられていた。

### (3) 新しい研究テーマ

現在の大学においても同様であるが、卒業論文題目からは、若い世代がどのようなことに関心をもつのが分かる。戦前においても近代史研究のみならず、新しい研究テーマの萌芽を見出すことができる。昭和初期の特徴のひとつに、学問史への関心が見いだせる(1931年の堀勇雄「江戸時代の歴史學」など)。そのほか、女性史に関する卒論も注目される。

1908年 中尾謙吉「我國古代に於ける女子の地位」

1928年 井手一馬「日本源始(ママ)古代に於ける女人政治」

1932年 岡田章雄「中世武家社會に於ける女性の經濟的地位」

1935年 辻村輝雄「鎌倉時代武家の女性」

などである。岡田は中世後期・近世初頭の日欧関係史の専門家で、歴史教育への取り組みでも知られているが、卒業論文は女性の地位に関するものだった。井手は民俗学的立場で古代史に取り組んだ人物で、戦後は佐賀大学で教鞭をとった<sup>(17)</sup>。辻村は戦後、女性史研究の開拓者となった<sup>(18)</sup>。信州大学に勤めながら『信州女性史』(1978年)を執筆している。女性史といえは女性研究者の活動が注目されがちであり、戦前・戦中の東京帝国大学国史学科に女子学生はいなかったが<sup>(19)</sup>、そのようなジェンダーバランスの場において、卒業論文以来「女性史」を志した学生がいたことには注意したい。

近代史や女性史をおこなうことが少数派という環境のもとで、どのような契機で、どのような関心をいだいて、卒業論文のテーマに選択することになったのか。あらためて卒業生一人一人のライフヒストリーを考える必要がある。今後の課題である。

また、本稿では分析することはできないが、「彙報」には史学科以外の文学部の学科の卒論のうち、史学に関係のあるものの題目を載せている。こうした史学以外の学科に関する『史学雑誌』彙報のデータを収集して、当時の東京帝国大学文科大学(のちの文学部)における広い意味での歴史研究・教育のありようを総合的に分析することも可能であろう。

### (4) 華族の歴史学者——個人のバックグラウンド

「名簿」および「彙報」を通覧して気づくのは、華族出身者の存在である。他の文学部諸学科の事例と比較する必要はあるが、国史学という学問の性格上、華族出身で歴史に関心をもつ学生が進学した可能性は想定できる。日本近代史研究の開拓者の一人である大久保利謙(1928年卒)(侯爵)や日本古代史の井上光貞(1942年卒)(侯爵井上三郎長男)の存在が有名であるが、この2人以外にも管見のかぎり次の卒業生がいる。

1907年卒 松平直幹(子爵、旧越後糸魚川藩主家)

(40)

- 1907年卒 松平乗統（子爵、旧西尾藩主家）  
1911年卒 徳川義親（侯爵、旧尾張藩主家）  
1912年卒 山口（のち琴陵）重鑑（子爵山口弘達四男、旧常陸牛久藩主家）  
1915年卒 佐竹義春（侯爵、旧秋田藩主家）  
1920年卒 浅野長武（侯爵、旧広島藩主家）  
1925年卒 三條西公正（伯爵、正親町三条実継の子）  
1927年卒 藤磨王（のち筑波藤磨）（山階宮菊磨王第三王子）  
1936年卒 副島種經（伯爵副島道正四男）  
1939年卒 二条（のち牧野）博基（子爵、二条正磨子、牧野健之助の養子になる）  
1941年12月卒 織田長繁（子爵、旧大和芝村藩主家、有楽流家元）  
1942年卒 坊城俊孝（伯爵坊城俊良次男）  
1943年卒 武者小路穰（子爵武者小路家の一族）

三條西や筑波、武者小路は歴史家としても名前を知られている。浅野は戦後、東京国立博物館長などを歴任する。また、学徒出陣のために戦後の卒業生となるが、史料編纂所教授となる近衛通隆（近衛文磨次男）がいる。

佐竹義春の卒論は「近世佐竹義和の民政」であり、自家の歴史をテーマにしていた。徳川義親の卒論「近世木曾の研究特に林政」は、尾張藩の林政に関する研究である。いずれも自家の歴史と関わりのあるテーマを選んでいる。ほかにも坊城俊孝「戦国時代に於ける公卿の在國」のように公家（堂上華族）出身者が公家を研究テーマに選ぶ例がみられる。

華族ではないが、土岐龍雲（琴川）は「中世土岐家興亡史」を卒論の題目とし、岐阜の郷土史家として知られていた。1908年卒の東恩納寛博は沖縄出身で、琉球史の開拓者として知られている歴史家であるが、卒論の題目は「琉球方面ヨリ見タル島津氏ノ對琉球政策」であった。1916年卒の千嘉次はのちに武者小路千家家元となり、宗守を襲名するが、その卒論は「歴史より見たる茶及茶道」である。韓国人学生である李弘植（1935年卒）は「任那の成立とその統治」という古代日本・朝鮮史の卒論を執筆しているが、朝鮮史に関心をもつ黒板勝美に高く評価されていたという<sup>(20)</sup>。個人的なバックグラウンドにもとづく卒論のテーマ選択がなされた事例として興味深い。

## (5) 【表】に関する注意事項

表は『史学雑誌』彙報に準拠しているが、入学者および卒業生の氏名に関しては戦前の『官報』に掲載されている。たとえば、1937年5月入学者は31名で、正規年数の3年を経た1940年5月の卒業生は25名である。このなかには上級学年からの留年・休学も含まれているので一概にいえないが、2割ほどドロップアウトしていると思われる。『官報』を利用して入学者数の変遷や留年率・退学率なども明らかにできるが、今回は作業をすることができなかった。今後の解題としておきたい。

また、『古代文化』48巻9号付録（1996年）所収の「帝国大学史学科卒業生名簿：明治20年-昭和29年」には、東京帝国大学国史学科の卒業生の一覧が掲載されている（以下「名簿」）。【表A】の氏名は、この「名簿」に基づいてカッコで補足している（後に改名した人物など）。この「名簿」と比較すると、若干の齟齬がみられることにも注意したい。「名簿」では「選科」の卒業生を採録していないが<sup>(21)</sup>、『史学雑誌』彙報のほうは「選科」という注記をつけながら、卒業論文を執筆した「選科」学生を掲載している。その人数は以下の通り。

1907年1人、1908年2人、1909年1人、1910年1人

1915年1人、1916年1人、1919年～1923年各1人、1926年1人

正規学生の増加にともなう定員収容の問題により、1924年からは選科生の募集が停止されるが<sup>(22)</sup>、それまでに13名の選科生が卒業論文を執筆している。のちに朝鮮史編纂委員会委員となる栢原昌三（1907年卒業）<sup>(23)</sup>や卒業後史料編纂所に入って3年後には編纂官補となる西岡虎之助（1921年卒業）など、「選科」出身で活躍している歴史家は多い。

但し「選科」として卒論を書いているにもかかわらず、2年後、本科卒業として「名簿」に名前が載る人物がいることには注意したい。1920年「選科」卒業の藤野憲夫は、「名簿」では1922年、1926年「選科」卒業の圭室諦成は「名簿」では1928年の卒業生となっているが、兩人ともに「名簿」の卒業年には「彙報」の卒論題目に名前がない。圭室は日本仏教史の大家として知られ、辞典類には「昭和3年東京帝国大学文学部国史学科卒業」とあるばかりで、「選科」卒業の事実は知られていないが、同じ1926年卒業の坂本太郎の回想には「選科生の圭室諦成君」とみえる（坂本太郎『古代史の道』<sup>(24)</sup>）。

「彙報」と「名簿」には若干の齟齬がある。「彙報」には「名簿」にない人物もみえる（1921年卒業の三宅憲治、1932年卒業の北條四男、1941年3月卒業の長正俊）。逆に、「名簿」に名前はあるが、「彙報」では卒論題目を確認できない人物として、布施俊（1913年10月卒業）、江渡用藏（1914年10月卒業）、太田信之（1914年10月卒業）、西村伊之助（1921年3月卒業）、堀口正俊（1941年3月卒業）、栄国男（1943年9月卒業）の6名がいる。布施・江渡・太田は10月卒業とであることに関係するか。

また、1929年以降、「彙報」には複数年に同一人物が掲載されるケースがあらわれる。卒論を提出したものの、卒業しなかった人物に関して、「彙報」がそのまま掲載している点には注意が必要である。最終的に受理されたものを卒論のデータとする考え方もあるが、その年ごとの卒論の傾向を調べるという目的から、敢えて重複分は【表A】に残すことにした。具体的に挙げると、以下の12名である。

1929年・30年 高橋重五郎（「名簿」1930年卒業）

1930年・31年 佐伯（黒板）昌夫（「名簿」1931年卒業）

1932年・33年 川上秀正（「名簿」1933年卒業）

1934年・35年 岡村清顯（「名簿」1935年卒業）

1934年・35年 前川正夫（「名簿」1935年卒業）

1934年・35年・36年 副島種經（「名簿」1936年卒業）

1934年・35年・36年 藤田四郎（「名簿」1936年卒業）

1936年・37年 小林堯春（「名簿」1937年卒業）

1936年・38年 丸野一眞（「名簿」1938年卒業）

1939年・40年 山田明（「名簿」1940年卒業）

1940年・41年 谷江晏（「名簿」1941年卒業）

1941年3月・12月 後藤信（「名簿」1941年12月卒業）

1年目も2年目も卒論の題目が同じである人物も多いが、テーマを変更する人物もいる。たとえば、副島種經は1934年には「國學の發達」という題目であったのが、1936年には「幕末開港の蠶糸業並に機業に及ぼせる影響」としている。当時の学生が留年を重ねながら卒論のテーマを模索していた様子が分かる。

「名簿」によると、1944年9月には36名の卒業生がいたが、そのうち『史学雑誌』『彙報』に卒業論文の題目が掲載されているのは11名のみである（「名簿」には名前のない内藤忠治の卒論題目も掲載されており、これを含めて12名の題目が「彙報」に掲載されている）。また、1945年9月の卒業生として、阿部善雄、斎藤正一、田中卓、田中健夫、松尾陽吉、目崎徳衛の6名の名前がみえるが、『史学雑誌』にこの年の卒業論文の題目は記載されていない。1944年9月に卒業したが、卒論題目の掲載されていない25名は、1943年10月の文科系学生の徴兵猶予停止にともなって入営し（いわゆる学徒出陣）、休学扱いのまま当初の卒業予定であった1944年9月には仮卒業とされた学年であった（卒業論文を執筆できた12名は何らかの事情で学徒出陣を免れた学生たちであったと考えられる<sup>(25)</sup>）。

卒論を執筆できずに卒業した25名のなかには、永原慶二（1942年入学）も含まれる。本稿で紹介したように、晩年の永原は戦前の卒業論文に関するエッセイを執筆しているが、その末尾に「兵役中に卒論も書かないまま「仮卒業」となった」とだけ書かれている。卒論を書くことすら許されなかった戦時下の国史学科の思い出が、戦後歴史学の担い手となった永原たちの出発点にあったのである。

#### 注

- (1) なお、【表A】の作成にあたっては、時田栄子・田中勇作両氏の協力を得た。
- (2) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 部局史一』（東京大学出版会、1986年）437－438頁。西山伸「戦時期における高等教育機関の在学・修業年限短縮について」（『京都大学大学文書館研究紀要』15号、2017年）。
- (3) 昭和初年は「名簿」の順列とほぼ対応するが、冒頭部分が一致しない。入学年次に係わるのか、本文でも指摘するように「官報」と照合して入学年次も確認する必要があるが、本稿では未検討に終わった。今後の課題としたい。
- (4) 卒業論文をもとにして雑誌論文を執筆した卒業生も多く、公刊された論文から内容を推測するとともに、それらの情報も集積する必要があるが、網羅的に検出することができず、今回は見送った。卒業論文が学生本人の手元に残り、家永三郎「私の卒業論文 葉師寺美術の根源を求めて」（『家永三郎集 第十六巻』岩波書店、1999年、初出1977年）のような回想（目次を含む）を残す卒業生もいる。
- (5) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 部局史一』（東京大学出版会、1986年）426－428頁。
- (6) 大久保利謙『日本近代史学事始め』（岩波新書、1996年）68・69頁。
- (7) 『本郷』47号、2003年、13頁。永原が参照した永原旧蔵『国史学科卒業論文題目一覧』（ガリ版刷「学生文庫」）のコピーを現蔵者（今井修氏）のご好意で入手したところ、表題を記した表紙はあるが、奥付などはなく、32頁の題目一覧から成る。「明治四十一年（史学雑誌歴史地理不載録）」という記載から史学雑誌・歴史地理の彙報をもとに作成したものであることが分かる（実際には明治41年の彙報に卒論題目は掲載されているほか、誤りも散見される）。1941年12月までの卒業論文題目が掲載されていることから、1942年4月に東京帝国大学文学部国史学科に入学した永原が当時入手したものであったと推測される。「学生文庫」は未詳だが、先輩後輩間で卒論題目情報などを融通する互助組織の存在を伺わせ、学生数が増加した昭和初期の学生文化の一端を示すものとして興味深い。1938年3月の卒論題目も抜け落ちて

おり（1937年3月の卒業生の卒論までは、「昭和十二年」のように卒業年の項に記載されているが、1939年3月卒業生の卒論からは「昭和十三年」のように卒業年度で記載されたことによると推測される）、そのために永原は1938年に執筆された3名の近代史卒論の存在を見落としたのだろう。なお、永原のエッセイの存在は渡邊剛氏にご教示いただいた。

- (8) 拙編『明治が歴史になったとき 史学史としての大久保利謙』（勉誠出版、2020年）参考。
- (9) 大内力『埋火 大内力回顧録』（御茶の水書房、2004年）9頁。上杉の略歴などは、「上杉重二郎教授略歴・研究業績等一覧」（『北海道大学教育学部紀要』31号、1978年）。なお、同略歴の343頁によれば辻善之助を指導教授として卒業論文を執筆し、卒業後は京城高等工業学校助教教授に就任した。ドイツ近代史研究に取り組んだ契機は1957年、東ドイツのベルリン・フンボルト大学教授に着任したことにある、という。
- (10) 小泉文子『もうひとつの横浜事件：浅石晴世をめぐる証言とレクイエム』（田畑書店、1992年）307頁。
- (11) 佐々木恵真・鋭市については未詳。
- (12) 『郷土史家人名事典 地方史を掘りおこした人々』（日外アソシエーツ、2007年）449頁。
- (13) 高橋昌郎『明治のキリスト教』（吉川弘文館、2003年）「あとがき」参照。
- (14) 大久保利謙の卒論題目は指導教官の平泉がつけたという（前掲『日本近代史学事始め』67頁。学生の卒論題目決定に対する平泉の影響力は注意が必要である。
- (15) 末松保和「国史学界の今昔37 朝鮮史の研究と私」（『日本歴史』560号、1995年）24頁。渡邊剛氏のご教示による。
- (16) 戦後は代表的な近代史家・マルクス主義歴史家となる。遠山が近代史研究を始めたのは、卒業後、文部省維新史料編纂事務局に勤めたことが始まりであったと思われる。
- (17) 『多久市史 人物編』（多久市、2008年）16-17頁。
- (18) 辻村輝雄「日本女性史研究について」（『日本歴史』52号、1952年）は男性研究者による女性史研究の提唱の早い事例として注目に値する。
- (19) 帝国大学令自体に女子学生の入学を禁じる規定はないが、戦前の東京帝国大学文学部は女子学生の入学を認めなかった。1920年から28年まで女子聴講生を認めていたが（1920年の史学科には内田とし子）、男子学生の増加にともなう収容定員の都合により、女子聴講生募集は停止されたという。富士原雅弘「旧制大学における女性受講者の受容とその展開：戦前大学教育の一側面」（『教育學雑誌』32号、1998年）82-83頁。
- (20) 「国史学界の今昔37 朝鮮史の研究と私」（『日本歴史』560号、1995年）。このほかにも、当時の国史学生には寺院・社家の子弟が多かったという回想もあることから、その実際の数や卒論テーマ選択の傾向性などについても考える必要があるが、今後の課題としたい。
- (21) 但し、1919年卒の西村為之助は「選科」であるが、「名簿」にのる。選科とは、本科に準じて、規定の学課の一部を選んで学ぶ課程で、旧制高等学校の卒業生以外は選科生として入学が認められた。さしあたり『東京大学百年史 通史二』参照。
- (22) 前掲・富士原雅弘「旧制大学における女性受講者の受容とその展開」83頁。
- (23) 古川祐貴「朝鮮史編纂委員・栢原昌三の「宗家文庫」調査」（佐伯弘次編『中世の対馬：ヒト・モノ・文化の描き出す日朝交流史』勉誠出版、2014年）。
- (24) 1939年に卒論を書いた金指正三は、「名簿」の卒業年は1941年3月となっているが、「彙報」1941年には名前がない。何らかの事情で卒業が遅れたか。

(44)

- (25) 12名全員の調査はできなかったが、近世史で卒論を執筆した山口啓二（1942年入学、44年卒業）は「学徒出陣の徴兵検査で肺結核のため再検査となり、数回再検査に出向く度に空襲のため検査できぬまま敗戦となり、出陣した多くの学友が特攻で戦死するという悲惨を抱いて92歳まで生きてきました。広島・長崎にも何度か赴き、核兵器全面禁止を願ってきました。」という（「核兵器全面禁止のアピール」への賛同者リスト」[http://www.antiatom.org/Gpress/wp-content/uploads/2013/05/130418\\_sign\\_sandonin.pdf](http://www.antiatom.org/Gpress/wp-content/uploads/2013/05/130418_sign_sandonin.pdf)（2021年7月6日13時00分最終閲覧））。なお、探索すれば他にも回想は多く見つかると思われ、今後の課題としておきたい。東京大学史史料室編『東京大学の学徒動員・学徒出陣』（東京大学出版会、1998年）。

（さとうゆうき 立教大学文学部史学科）

附表 A

卒業年	氏名	時代	卒業論文題目	備考	
1905 明治38	沼田 博雄 澤邊 復正 中村 護 物集 高量	古代	國分寺の興廢		
		古代	古代歸化民族史		
		古代	予が假想したる日本神代史概説		
		古代	神祭の分布		
1906 明治39	伊木 壽一 東 尚胤 花見 朔巳 田中 一元 町田 尚政 金子 健吉	中世	戦國時代に於ける朝廷		
		中世	関東諸豪と源氏の祖先との關係		
		近世	奥州近世史		
		古代	奈良朝佛教の政治上に及ぼせし影響		
		中世	室町時代に於ける漢文學の發達		
		近世	徳川時代に於ける經濟思想		
1907 明治40	長沼 賢海 嶺 直貫 川上 多助 若山 善三郎 松平 直幹 松平 乗統 谷井 濟一 栢原 昌三	中世	一向一揆を論ず		
		中世	伊達政宗を中心として研究したる戦國時代		
		中世	鎌倉時代に於ける關東の風俗		
		中世	南北朝以前の僧兵		
		中世	保元平治に於ける源平二氏の關係を論ず		
		近世	有徳院と徳川時代		
		古代	古代日韓の關係〈就中女王國及我古代の年紀〉		
		中世	足利幕府の明國貿易		
1908 明治41	宮地 直一 松本 勘太郎 竹島 寛 鈴木 榮一郎 松本 彦次郎 關 世男 東恩納 寛惇 小泉 幸治 中尾 謙吉 福延 徳 森 永吉 江戸 千太郎 阪本 廣太郎	7	未詳	八幡宮の研究	選科
		近世	自慶長至正徳江戸幕府之財政		
		古代	王朝時代に於ける皇親		
		中世	院政時代ニ於ケル院ト天皇トノ不和		
		古代	平安時代ニ於ケル世相		
		古代	平安朝ニ於ケル教育制度		
		近世	琉球方面ヨリ見タル島津氏ノ對琉球政策		
		中世	楠木正成の研究と其の後世國民教育に及ぼせる効果を論ず		
		古代	我國古代に於ける女子の地位		
		中世	長曾我部氏と四国		
		古代	大臣大連の勢力消長		
		古代	國史上ニ於ケル浪人問題		
		古代	奈良平安時代の財政の研究		
		中世	能登加三州に現はれたる上杉謙信		
1909 明治42	藤井 甚太郎 海老名 一雄 篠田 周之 齋藤 勳 細田 禮行 宮崎 榮雅 辻 盛 島田 増平 玉利 陟 牧野 純一 原 松四郎 藤懸 静也 樹下 快惇 清水 澤智 日高 奈太郎 (のち重孝) 太田 榮次郎 瀬川 克三 本吉 直二 中村 俊秀 窪 顯亮 高市 豫興 諏訪 強哉	7	古代	筑紫邊防考	選科 選科
		幕末	開國論の勃興並に初期の開國論		
		中世	南北朝合一以後に於る伊勢國司家		
		古代	王朝時代に於ける陰陽道の一斑		
		近世	天保改革と其時代		
		近世	元祿時代の佛教		
		中世	織田信長の統一計畫及其性格		
		中世	南北朝時代に於ける足利氏の九州經營		
		中世	實氏薨去以前の西園寺家		
		中世	後北条氏之民政		
		中世	鎌倉時代の商業		
		近世	浮世繪派の研究		
古代	平安朝初期の佛教及び其政治との關係				
不明	山伏の史的研究				
中世	九條兼實と其時代				
古代	天慶の亂				
幕末	開港論者長井雅樂の真相に就て				
中世	豊太閤征西以前の島津氏				
中世	平清盛				
近世	寛永前後の武士を論ず				
中世	足利尊氏の政略と手腕				
近世	徳川家康の民政				
1911 明治44	重原 慶信 安藤 祐専 山崎 庸	7	中世	武家勃興期に於ける武士の宗教信仰	選科
		近世	〈江戸時代〉排佛毀釋沿革考		
		中世	京都を中心とせる南北朝及室町幕府と佛教との關係		

卒業年		氏名	時代	卒業論文題目	備考					
1912	明治45	7	藤田 福太郎	近世	〈日露交渉〉北地遼源私考					
			浮田 直樹	近世	桃山時代に於ける徳川家康					
			鷺尾 祖鳳	中世	夢窓國師と當時の禪家					
			徳川 義親	近世	木曾の研究特に林政					
			龍居 松之助	近世	寛政天保両度改革前後に於ける江戸の社會心理状態一斑					
			土岐 龍雲	中世	土岐家興亡史					
			山口 (のち琴陵) 重鑑	中世	武田信玄の民政					
			小田 直藏	近世	秀吉の檢地事業					
			八束 清貫	古代	上代物部氏の研究					
			山田 善次	古代	上古日韓關係史 (新羅を中心とせる)					
1913	大正 2	7	松本 重彦	中世	武蔵七黨の研究					
			中村 孝也	近世	江戸幕府鎮國の由来を論ず					
			木宮 泰彦	中世	鎌倉時代に於ける禪僧と武士との關係					
			岩崎 孫八	近世	岡山藩政教考					
			山本 義雄	中世	聖一國師と當時の社會					
1914	大正 3	7	栗田 元次	近世	徳川時代の武家組織の研究					
			菊池 仁齡	古代	奈良平安朝時代の奥羽經營					
			魚澄 惣五郎	中世	承久以前の莊園制度に就いて					
			玉泉 大梁	中世	室町時代の田租					
			入田 整三	古代	瀬戸内海に於ける中古の海賊					
			保坂 貞義	中世	陸奥の藤原氏					
			磯部 康吉	古代	新撰姓氏録なる氣入彦命の傳説に就いての研究					
			1915	大正 4	7		龍 肅	中世	鎌倉幕府創業時代に於ける公武關係に就て	
							衣笠 健雄	未詳	日本交通史より見たる關所の研究	
							太田 熊太郎	中世	太田道灌	
吉田 照咩	中世	興福寺衆徒に就ての研究								
大槻 (のち野田) 厚明	中世	南北朝の講和								
小笠原 行照	中世	尼子氏の興亡								
佐竹 義春	近世	佐竹義和の民政								
古賀 映	中世	鎌倉時代を中心としたる太宰府								
有堀 市三郎	中世	院政論								
1916	大正 5	7				谷森 饒男	古代	檢非違使を中心としたる平安時代の警察状態	選科	
			高松 清	中世	太宰府を中心としたる武家勃興史					
			中谷 英眞	中世	石山本願寺に就て					
			西野 (のち毛利) 大順	近世	天保の改革に就て					
			千 嘉次 (のち宗守)	近世	歴史より見たる茶及茶道					
			栗林 卯平 (のち信朗)	中世	徳川時代以前問屋沿革史論					
			河鱈 實英	近世	舊幕時代に於ける公家衆私生活状態					
			御厨 準四郎	中世	赤松氏興亡考					
			遊佐 正雄	幕末	攘夷論の變遷					
			1917	大正 6	7	長岡 仙岳	中世	鎌倉時代に於ける浄土宗と舊諸宗との關係		選科
高力 得雄	近世	東西本願寺分立の顛末								
淺井 龍勝	中世	元寇役の論功行賞に就て								
二宮 止戈夫	古代	王朝時代海外交通								
一瀬 克己	中世	源頼朝の對家人政策								
1918	大正 7	7	平泉 澄	中世	中世に於ける社寺の社會的活動					
			藤田 亮策	近世	江戸時代の漕運					
			阿部 (のち竹岡) 勝也	中世	僧兵の發生					
			上野 菊爾	近世	國際的關係より見たる江戸幕府蝦夷經營史論					
			藤本 了泰	近世	江戸時代初期の浄土宗					
1919	大正 8	7	板澤 武雄	中世	北畠氏の東國經營					
			伊藤 起	近世	江戸時代後期に於ける江戸と町人生活					
			白澤 清人	近世	元祿、正徳を中心とせる公武關係					
			杉溪 由言	近世	公家之家職特に衣紋に就て					
			仲里 朝章	中世	室町創業期に於ける鎌倉と幕府の關係					
			村上 正充	中世	武田信玄の政治					
			西村 為之助	古代	我國上古及び中古の祭祀に就いて					
			飯田 梅太郎	中世	承久亂と其の人心に及ぼせし影響					
1920	大正 9	7				選科				

卒業年		氏名	時代	卒業論文題目	備考	
1921	大正10	3	浅野 長武	中世	室町時代の皇室と國民	1月卒業 選科
			中村 (のち昇塚) 清研	中世	南北朝室町時代に於ける日蓮宗の大勢	
			星野 歳馨	中世	尼子氏の興亡	
			吉田 仁作	古代	熊襲考	
			藤野 憲夫	近世	織田豊臣二氏の經濟政策	
			三宅 憲治	近世	江戸時代備荒貯穀の研究	
			田保橋 潔	幕末	主として日米關係より觀たる日本の開國に就て	
			中島 俊司	中世	一揆之研究特に土一揆に就て	
			長谷 勝利	近世	徳川初期の神祇道	
			西岡 虎之助	古代	軍國制之崩壞に關する研究	
1922	大正11	3	内藤 政光	近世	參勤交代	選科
			森谷 秀亮	古代	奈良朝時代を中心とする寺領の研究	
			藤崎 俊茂	中世	泰時の政治に就て	
			楠田 覺眞	中世	本願寺覺如を中心としたる鎌倉後期南北朝前期の眞宗	
1923	大正12	3	渡部 多仲	古代	王朝時代に於ける墾田に就いて	選科
			相田 二郎	中世	土地沽却上の支拂品より見たる錢貨流通状態 (自王朝時代至鎌倉時代)	
			澤田 吾一	古代	奈良朝時代の人口論	
			甘蔗 普濟	古代	上代に於ける海部に就いて	
			和田 軍一	古代	上代に於ける歸化人の活動	
1924	大正13	3	鳥羽 正雄	未詳	關東に於ける都市の發達	選科
			丸山 二郎	古代	上代史に於ける東方及蝦夷に對する政策	
			三上 左明	中世	室町戰國時代を中心とする伊勢神宮と國民との關係	
1925	大正14	3	吉村 茂樹	古代	藏人所の研究	選科
			岩生 成一	近世	江戸時代鎖國前後に於ける日支貿易	
			佐々木 隆美	中世	吉田兼俱と其唯一神道	
			三條西 公正	中世	室町末期に於ける公家生活	
			多久 龍三郎	近世	享保以後に現はれたる奢侈論に就ての一考案	
1926	大正15	3	橋村 (のち川副) 博	中世	毛利氏の隣交政策に就て	1926年卒業 1926年卒業 1925年卒論
			三條西 公正	中世	室町季世の公卿の研究	
			多久 龍三郎	近世	江戸時代諸藩に招聘せられたる學者の殖産上に及ぼしたる功績	
			松平 直國	古代	奈良朝の文化	
			坂本 太郎	古代	王朝時代の交通の研究一特にその驛制について	
			中村 榮孝	中世	中世に於ける日鮮の關係	
			原田 亨一	近世	阿国歌舞伎を中心として觀たる慶長前後に於ける民衆藝術の發達に就て	
			圭室 諱成	中世	京都五山禪林に就いての一考察 (主として應永より文正頃まで)	
			藤磨王 (のち筑波 藤磨)	古代	日唐通交と其影響	
			井上 久米雄 (彙雄)	古代	本邦古代の氏姓の研究	
1927	昭和2	3	梅田 俊一	中世	鎌倉幕府の司法制度	選科
			末松 保和	近世	江戸時代に於ける北方問題の進展	
			羽仁 五郎	近世	佐藤信淵に就いて	
			村田 貞雄	近世	近世初期に於ける浪人の研究	
			上良 (のち岡田) 實	幕末	幕末諸藩に於ける洋學の開進	
			秋山 謙藏	中世	中世に於ける琉球の國際的地位	
			井手 一馬	古代	日本源始 (ママ) 古代に於ける女人政治	
			市村 其三郎	中世	日蓮の諸宗排撃に就きて	
			岩崎 航介	未詳	日本刀の史的研究	
			小野 均 (見嗣)	近世	近世城下町の研究	
1928	昭和3	3	及川 健助	古代	平安朝に於ける貴族生活	選科
			小久保 利謙	中世	戰國諸侯の政策に現はれたる近世的傾向	
			小林 健三	近世	近世に於ける神國思想の發展 (特に垂加神道を中心とす)	
			千田 貞榮	近世	近世初期の交通	
			田山 信郎 (方南)	中世	中世に於ける武士の共和團結	
			森末 義彰	近世	江戸初期に於ける演劇と社會との關係	
			高橋 重五郎	近世	江戸後半期の經濟的考察	
			阿南 浩	近世	近世封建國家の成立について	
			石村 吉甫	古代	平安時代に於ける加茂祭の研究	
			岩間 武雄	近世	公家社會に於ける秘傳の文化史的研究	
1929	昭和4	3	岡村 (のち山田) 康彦	古代	平安時代後期の佛教信仰	1930年卒

卒業年		氏名	時代	卒業論文題目	備考		
1930	昭和5	3	片山 巍	古代	上代に於ける關の研究		
			梶原 昌夫	近世	木曾街道の研究		
			喜田 新六	古代	上代に於ける行旅の研究		
			橋本 (のち中田) 實	中世	中世に於ける武士道の研究		
			中村 吉治	近世	近世初期の農政		
			松本 周二	中世	伊勢神道の成立		
			丸山 國雄	近世	江戸時代前期に於ける銅の經濟史的研究		
			三坂 圭治	中世	中世に於ける海上權		
			水谷 治郎	古代	上代公文書制の研究		
			武藤 桂巖	古代	僧綱制度の史的考察		
			森 克巳	中世	日宋貿易の研究		
			和島 芳男	古代	平安朝の陰陽道		
			林 大吉郎	近世	豊臣秀吉の宗教政策		
			高橋 重五郎	近世	江戸後半期の經濟的考察		1929卒論
			川崎 庸之	中世	鎌倉時代初期に於ける新佛教運動に就いて		
			紀 祝	近世	江戸時代に於ける諸藩の財政に就て		
			佐伯 (黒板) 昌夫	古代	上代に於ける市について		1931年卒
1931	昭和6	3	田中 順之助	近世	徳川幕府の訴訟制度		
			高木 眞太郎	中世	室町時代初期の日鮮關係		
			竹内 理三	古代	奈良朝を中心とする寺院經濟の研究		
			武居 芳城	近世	助郷の研究		
			玉川 治三	近世	江戸幕府の法制上より觀たる農民の生活		
			中野 効四郎	中世	鎌倉幕府の社寺政策		
			橋本 克彦	古代	上代に於ける儒教的思想の趨勢		
			藤木 邦彦	古代	政所の研究—特に政所政治の源流とその發展に注意せる—		
			寶月 圭吾	中世	中世に於ける起請の研究		
			佐伯 (黒板) 昌夫	古代	上代の市に就て		1930年卒論
			西尾 十四三	幕末	幕末經濟史上より見たる幕末開港		
			阿部 眞琴	近世	江戸時代後半期に於ける地理的知識		
			伊東 多三郎	近世	國學の史的考察 (特に古道説に關して)		
			遠藤 元男	中世	中世に於ける職人に就いて		
			岡本 堅次	古代	上代に於ける庶民の家族に就いて		
			大館 治氏	近世	徳川幕府の對火災策について		
			北山 (のち永守) 良治	古代	平安時代に於ける寺院制度の崩壞		
1932	昭和7	3	胡麻鶴 醇之	中世	鎌倉時代に於ける伊勢神宮の研究		
			菅原 教信	近世	江戸時代初期に於ける排佛思想に就いて		
			妹尾 榮藏	近世	江戸時代に於ける新田開發に就いて		
			橋 重人	古代	奈良朝に於ける地方制度の研究 (特に郡司を中心として)		
			湊元 克巳	近世	江戸時代の重農思想の史的考察		
			土井 弘	古代	上代兵制之研究		
			平田 孝次	近世	江戸幕府の町人政策 (町人の負擔について見たる)		
			平山 行三	中世	守護地頭制度の崩壞		
			堀 勇雄	近世	江戸時代の歴史學		
			昔川 剛六	中世	鎌倉時代の新興佛教 (特に法華宗に就いて)		
			高木 早苗	中世	鎌倉時代の内地交通		
			杉本 勲	近世	江戸時代初期に於ける佛教基督教の交渉		
			井料 薫	近世	徳川幕府の教育政策		
			磯貝 正	中世	時宗教團の起原及其發達		
			岡田 章雄	中世	中世武家社會に於ける女性の經濟的地位		
			菅野 修助	近世	江戸幕府の海事政策		
			川上 秀正	中世	源實朝の思想及其政治的地位		1933年卒業
黒田 省三	中世	徳政の研究					
小谷 浩藏	古代	畿内考					
小宮 一夫	近世	江戸幕府の土地政策					
兒玉 幸多	近世	近世初期に於ける農村の發達					
佐治 芳雄	中世	戰國時代北陸に於ける一向宗の發展					
齋藤 忠	古代	本邦古代に於ける葬制の研究					
下村 富士男	近世	江戸時代に於ける湊の研究					

卒業年		氏名	時代	卒業論文題目	備考	
1933	昭和 8	3	杉山 昌三	古代	公家時代の國防に就いて	1932年卒論
			伊達 研次	近世	参観交代と江戸の膨張との關係に就いて	
			豊田 武	中世	室町時代の商業	
			中野 昌	近世	近世宿驛之研究	
			中村 光	近世	江戸時代に於ける奥羽の經濟的地位	
			福田 富貴夫	古代	上代の備荒貯蓄制に就いて	
			北條 四男	幕末	幕末に於ける日英關係	
			矢野 健治	近世	江戸時代に於ける公家の財政に就て	
			渡邊 保	中世	中世武家の檢斷制に就いて	
			川上 秀正	中世	鎌倉時代の公家生活	
			山崎 (のち原) 平三	近世	近世初期に於ける金銀貨幣の研究	
			石井 孝	幕末	幕末に於ける諸藩藩の擡頭 (特に幕府専制より諸藩藩合議制への移行に就いて)	
			石崎 正雄	近世	創始時代に於ける徳川幕府の對宗教政策	
			宇多 薩夫	中世	鎌倉武士の信仰に就いて	
			宇野 治春	近世	江戸時代に於ける公家の精神生活	
			内海 秀夫	中世	鎌倉武士の精神生活	
			家令 俊雄	古代	上代に於ける太宰府の研究	
			金子 得之助	近世	近世初期に於ける儒學の勃興 (特に間齋學について)	
			佐々木 勇	中世	平安末期より鎌倉時代に至る末法思想について	
			櫻井 豊次	近世	近世初期町人階級の勃興	
			須貝 興一	古代	平安時代後期に於ける公家の精神生活	
			鈴木 泰山	中世	中世に於ける禪宗の地方的發展	
			鈴木 良一	中世	中世に於ける農民の統制 (特に社寺を中心として)	
			田名網 宏	古代	出學の研究	
			田中 眞	近世	江戸時代に於ける農村自治	
			多賀 宗準	中世	鎌倉時代に於ける國體思想の發展	
			戸田 (のち阿原) 大光	中世	本願寺教團の發展	
			福山 精義	近世	江戸時代後半期に於ける學問の民衆化 (特に儒學を中心として見たる)	
			藤井 信	近世	江戸時代に於ける蘭學の勃興に就いて	
			藤田 宏 (のち寛雅)	古代	平安朝時代の彌陀信仰 (特に常行堂念佛を中心として)	
			馬杉 太郎	近世	近世に於ける出版印刷の發達	
			牧野 (のち平田) 仁	近世	江戸時代前半期に於ける儒者の政治思想及びその活動	
宮田 俊彦	古代	遣唐使の研究				
桃 裕行	古代	上代に於ける學制の研究				
山本 重治	中世	中世後期に於ける禪僧と地方文化				
1934	昭和 9	3	田坂 正	近世	平田篤胤の研究	1935年卒業
山口 巽			古代	上代に於ける物部氏について		
青柳 英夫			近世	徳川時代に於ける機業の發達		
伊野部 重一郎			古代	奥羽拓殖の特色と趨勢に就いて		
今井 林太郎			中世	中世に於ける莊民に就て		
岡村 清顯			近世	株仲間研究		
風間 泰男			中世	室町時代に於ける酒屋、土倉の發展及びその社會との關係		
北山 茂夫			古代	奈良時代の公民に就いて		
久保田 取			中世	鎌倉時代後期に於ける武家の研究		
佐藤 三郎			中世	鎌倉時代に於ける非御家人に就きて		
鹽田 保美			近世	徳川時代警察制度の研究		
鹽見 薫			近世	近世初期社會秩序の成立 — 特に「身分」制度に就いて —		
鳥田 俊彦			古代	平安朝に於ける地方官制の崩壊		
副島 種經			近世	國學の發達	1936年卒業	
田中 眞雄			中世	室町時代の守護地頭		
野口 逸三郎			近世	近世初期の農村について		
野村 晋城			中世	戰國時代に於ける都市の發展		
平田 俊春			古代	平安時代に於ける寺院の活動		
藤田 四郎			近世	江戸時代の交通 — 主として街道と關所とに就て —		1936年卒業
藤原 治			近世	徳川時代に於ける入會の研究		
前川 正夫			近世	近世初期の商業組合	1935年卒業	
松崎 宗雄			古代	上代歸化人の研究		
三好 不二雄			中世	戰國時代に於ける寺院經濟		

卒業年		氏名	時代	卒業論文題目	備考	
1935	昭和10	3	箭内 健次	近世	近世初頭に於ける日本とイスパニヤとの關係——フィリッピンを中心とせる——	1934年卒論 1936年卒業  1936年卒業 1934年卒論
			吉村 宮男	近世	近世に於ける近江商人の發展	
			大谷 幸雄	近世	徳川幕府の蝦夷地經營	
			大野 達之助	古代	傳教大師の大乗戒創立に就て	
			岡村 清顯	近世	徳川幕府の町人政策	
			副島 種經	近世	徳川時代の織物業に就いて	
			鳥巢 通明	近世	公家に於ける崎門學の研究	
			平久保 章	中世	〈足利時代に於ける〉五山禪僧の活動	
			藤田 四郎	近世	天保の改革に就て	
			前川 正夫	近世	城下町について	
			峰岸 義雄	近世	徳川初期に於ける江戸の發展	
			梅田 嵩	近世	近世初期に於ける武士の文化的活動	
			小澤 誠一	近世	徳川前半期に於ける町人の發展	
			扇谷 正造	古代	上代の兵制——今の兵制を中心として——	
			北島 正元	近世	徳川幕府直領の研究	
			小西 四郎	古代	班田制の崩壊	
			重永 (のち野田) 義雄	古代	上代の徭役制に就いて	
			玉村 竹二	中世	公家と禪宗	
			辻村 輝雄	中世	鎌倉時代武家の女性	
			徳田 劍一	中世	中世に於ける水運の發達	
			中村 辛一	近世	徳川幕府の工業政策	
			沼田 次郎	近世	俵物貿易之研究	
			林 正治	古代	奈良平安兩朝に於ける錢貨の流通に就て	
			原田 文穂	中世	平安朝末期の精神生活	
			松岡 喜代志	幕末	水戸藩を中心として見たる攘夷論の發展	
			水上 一久	中世	莊園制の崩壊より見たる中世の東寺領	
			矢島 榮一	古代	班田制以前に於ける農業	
李 弘植	古代	任那の成立とその統治				
1936	昭和11	3	渡部 道夫	古代	上代に於ける神社經濟の研究	1934・35年卒論 1934・35年卒論
			五十里 精一	近世	近世初期の鑛山	
			副島 種經	幕末	幕末開港の蠶糸業並に機業に及ぼせる影響	
			藤田 四郎	近世	江戸時代浪人の研究	
			太田 晶二郎	古代	〈藝文より觀たる〉支那分化攝取の研究	
			花田 雄吉	古代	上代に於ける家族制度	
			林 文雄	古代	王朝時代の藝術と社會	
			井上 清	近代	近代兵制に關する一研究——特に陸軍を中心として——	
			石上 韶	近世	江戸中期以後に於ける農村荒廢と其對策	
			石田 秀文	中世	高野山教團の發展	
			磯貝 正義	古代	律令時代に於ける地方政治——特に郡司を中心として——	
			遠藤 修平	近世	江戸時代に於ける儉約令竝儉約論に關する一考察	
			小野 信二	近世	都市としての江戸の發展と物資の移動に就いて	
			小野 壽人	幕末	長州藩に於ける尊王攘夷論の醸成	
			尾崎 喜佐雄	古代	奈良時代の國民生活	
			奥田 眞啓	中世	鎌倉時代の武士と神社——特に其氏族的信仰形態に就て——	
			高坂 好	中世	中世に於ける地方寺院——特に寺領莊園の場合——	
			狩川 浩	古代	國司制の研究	
			木村 茂平	中世	戰國時代の土民兵に就いて	
			小林 堯春	近世	徳川幕府の内国商業政策	
			駒田 喜太郎	中世	鎌倉幕府の鎮西統治	
			佐々木 國雄	古代	律令時代に於ける國防と國民生活との關係	
			下野 和夫	中世	中世に於ける商業に對する課役	
			新城 常三	中世	戰國時代に於ける交通——特に諸侯の交通政策を主として——	
			田中 久夫	中世	戰國時代の大名と佛教	
			林 文雄	古代	王朝時代の藝術と社會	
			原 敬吾	近世	本居宣長の古神道	
松島 博	中世	中世に於ける伊勢神道				
松本 純郎	近世	素行學の研究				
山下 千本	幕末	〈近世末期に於ける〉海外文明の吸取——特に薩藩を中心として——				
					1937年卒業	

卒業年		氏名	時代	卒業論文題目	備考		
1937	昭和12	3	横井 保平	近世	近世初期基督教問題の社會的考察	1936年卒業	
			小林 堯春	近世	江戸時代に於ける大都市の下層民——特に江戸を中心として		
			永井 澄	中世	戦國時代に於ける本願寺教團		
			家永 三郎	古代	上古初期に於ける新文化發展の精神史的考察		
			池田 皓	中世	應仁亂の文化史的意義——特に古典の保存と地方武将の好學について		
			石母田 正	中世	中世寺院に於ける集會制度の研究		
			上野 唯雄	近世	山鹿素行研究		
			西岡 道一	古代	国衙領に就いて		
			遠藤 宗珪	中世	室町時代五山制の研究		
			鬼塚 正二	近世	近世初期に於ける西力東漸の拒否とその思想形態の成立		
			萱嶋 篁	古代	武士の勃興		
			佐久 毅	近世	近世に於ける都市と農村——徳川幕府の政策より見たる		
			坂元 正典	古代	古代末期社會に於ける大陸文化の影響		
			瀬谷 義彦	幕末	水戸學派に於ける國體論の發展——特に藤田幽谷を中心として		
			田名部 貞宣	近世	近世に於ける飢饉の社會的影響		
			千葉 榮	近世	吉川神道の研究		
			千村 保	中世	鎌倉幕府に於ける御家人の經濟問題と族的團結——主として封建制度發達史上より考察		
			西村 光矩	古代	上代末期に於ける國民思潮の動向		
			原田 昂	近世	近世初期に於ける宗教政策		
			萬羽 正朋	近世	近世初期に於ける農村支配について		
			西村 光矩	古代	上代末期に於ける國民思潮の動向		
			原田 昂	近世	近世初期に於ける宗教政策		
			日高 一	古代	上代に於ける貸借制度の研究——主として私出學を中心として		
			古谷 綱俊	幕末	幕末前半期の對外貿易（自安政六年六月二日至元治元年九月）		
			松木 亮	中世	院政時代に於ける造寺の社會史的考察		
			松本 新八郎	中世	中世末期の農業		
			丸野 一眞	近世	徳川時代の交通需要及旅客		1938年卒業
			三木 正太郎	近世	篤胤學の研究——特に宣長との關聯に於て		
			三木 轟	古代	大化改新に現はれたる古代政治の理念に就いて——特に祭政一致の問題を中心として		
			森田 誠一	近世	防人に就いて——特に社會的影響の方面		
			山本 大	中世	守護大名の研究		
			谷川 清敏	古代	上代に於ける歸化人の研究		
			1938	昭和13	3		風間 慶三
高柳 知足	近世	近世に於ける内國貿易の一考察——諸藩の貿易政策を中心として——					
遠山 茂樹	中世	吉野時代に於ける武士勢力の趨勢					
丸野 一眞	幕末	幕末攘夷論					
阿部 武彦	古代	上代に於ける徭役制の研究					
相羽 玲三	近世	近世に於ける古事紀研究——特に賀夜眞淵・本居宣長を中心として——					
伊勢 宗治	近世	近世武士道の一考察					
稲葉 仁	中世	室町時代に於ける公家階級の一考察					
上杉 重二郎	近代	我國に於ける立憲政治の確立について					
大竹 正三郎	近世	近世社會秩序の成立と農村					
芳 即正	近世	江戸時代に於ける國學者の排佛論					
栗和田 勝信	中世	戦國時代の公家と朝政					
佐々木 望	近世	谷川土清研究					
坂井 誠一	中世	中世末期に於ける公卿の精神生活（一條兼良を中心として）					
關 敦	中世	北畠親房卿の研究					
田邊 元生	近世	近世後半期に於ける社會思想——特に經濟政策論との關聯について——					
多賀谷 健一	近世	近世初頭としての安土桃山時代の歴史的意義に關する考察——織田信長の政治思想を中心として——					
高木 成助	古代	上代に於ける氏族の研究					
武島 嘉正	古代	上代に於ける奥羽拓殖					
鶴田 靖	古代	奈良時代の軍團制に就て					
西村 正男	古代	食封制度について					
松本 捨己	古代	上代に於ける神社經濟の動向					
村野 守次	近代	西南戦争の研究					
望月 健夫	古代	寧樂より平安へ					

卒業年		氏名	時代	卒業論文題目	備考	
1939	昭和14	3	桃園 惠眞	近世	徳川時代の寺院統制に就いて	
			安川 實	近世	古學神道成立の由来及成立の研究	
			柳 宏吉	未詳	神代史研究に對する一考察	
			佐々木 惠眞	近代	明治初期に於ける外交	
			久保田 辰一郎	近世	谷泰山の研究	
			児玉 照香	近世	近世に於ける關所——特に幕府の關所を中心として——	
			田丸 秀治	古代	上代國司制の研究——特に交替について——	
			中田 俊太郎	中世	神道五部書の研究	
			三上 四郎	中世	伊勢太神宮御陵御厨について	
			彌永 貞三	古代	上代の貨幣史に關する研究	
			岩田 千春	近世	浅見綱齋の研究	
			興野 高也	近世	水戸學派に於ける神道と佛教の問題	
			狩野 亨二	近世	江戸時代農村に於ける灌漑に就いて	
			金田 録郎	幕末	吉田松陰教育思想の歴史的考察	
			金指 正三	民俗	我が國に於ける星振信仰の史的考察	
			菊池 昌孝	近世	近世初期に於ける徭役の社會的考察	
			虎頭 民雄	中世	室町時代に於ける對支貿易	
			佐藤 進一	中世	鎌倉幕府訴訟制度の分化	
			白川 正	近世	陽明學派の神道觀——特に熊澤蕃山を中心として——	
			高橋 元昭	中世	大徳寺門流の研究——鎌倉末期の京都に於ける禪風より起こして江戸初期に及ぶ——	
			藤間 登	古代	令制史上兼官の研究	
			名越 時正	近世	水戸學發展の一考察——特に藤田東湖の國體論を中心として——	
			二条 (のち牧野) 博基	中世	供御人の研究——主として貢納に就いて——	
			野田 良國	近世	切支丹の傳教と禁制とについて	
			花見 恭	中世	中世に於ける職人の研究	
			原田 伴彦	中世	中世都市の史的意義	
			深溝 徳味	古代	上代に於ける浄土願生者の活動——宗教改革史上に於いて彼等が為せる否定と創造に就いて——	
			藤村 禪	中世	中世初期の武家社會と武士道	
			細川 公正	古代	僧尼令と菩薩僧の研究	
			増田 英男	中世	北条時宗論	
			松島 友久	近世	近世武家の經濟的困窮に就いて	
			松平 乗文	中世	室町時代に於ける守護勢力の進展——備中國新見庄の研究——	
			三島 善鏡 (のち良兼)	古代	上代に於ける公驗制度の研究	
宮 栄二	中世	鎌倉時代に於ける佛家神道論の發達				
向井 義郎	中世	中世の大名——特に守護大名の成立を中心として——				
山田 明	幕末	藤田幽谷研究	1940年卒業			
谷 江晏	近世	江戸時代に於ける土地開發に就いて	1941年卒業			
原 正	幕末	佐久間象山の研究				
村尾 次郎	古代	〈上代に於ける〉歸化人同化の一考察				
山田 明	幕末	藤田幽谷の研究	1939年卒論			
阿河 準三	近世	江戸幕府の教育行政——特に寛政異學の禁を中心として——				
秋本 典夫	幕末	〈維新前後に於ける〉勤皇心の實踐的發展				
浅石 晴世	近代	明治初期に於ける唯物論的世界觀の史的考察				
浅野 勉	中世	平氏一族の歴史的意義——特に清盛を中心として——				
雨宮 義人	近世	近世に於ける山陵尊崇の復活				
池邊 彌	古代	上代に於ける金峯山信仰				
上村 義一	中世	村上源氏に就いて				
植田 彰	中世	日宋交通に於ける自主觀念の問題				
大澤 元太郎	近世	江戸幕府領の研究				
荻原 久康	中世	源頼朝の政治に關する一考察				
小松 (のち井上) 薫	古代	聖を中心として見たる浄土教の展開				
後藤 四郎	中世	室町時代に於ける公家社會の學問に關する一考察——一條兼良の場合を中心として——				
佐々木 祐三	近世	平田篤胤と佐藤信淵				
陶山 國見	古代	秦氏族の研究				
中村 俊平	近世	寶曆明和事件の考察				
西田 穆人	近世	近世初期に於ける港湾都市の研究				

卒業年		氏名	時代	卒業論文題目	備考					
1941	昭和16	3	藤陵 薫	古代	上代賤民制度の成立	1940年卒論				
			本間 敏雄	幕末	幕末維新史上に於ける公卿の動向——特に岩倉具視を中心として——					
			町田 耕六	近世	山鹿素行の研究					
			宮地 治邦	中世	攝津住吉神社の研究——特に吉野時代を中心として——					
			村田 正恭	古代	「帳内資人」論考					
			森 杉夫	近世	海防論の發達（ペルリー渡来まで）					
			谷 江晏	近世	江戸時代に於ける土地開發					
			阿部 良三	近世	元祿時代に於ける商人の潛勢力に就いて					
			荒川 久壽男	近世	近世洋學攝取の一考察——特に會澤正志齋の洋學批判の側より——					
			井畔 秋芳	近世	望楠神道の成立					
			白居 利泰	中世	〈天文より慶長に至る〉鑛山業に就いて					
			上田 勝彦	近世	近世初期に於ける神宮復興の運動					
			上田 亨	古代	律令時代に於ける家族に就いての一考察					
			太田 弘爾	中世	中世に於ける大名分國の成立過程					
			奥村 幸清	中世	鎌倉時代御家人所領の研究					
			落合 保三	古代	我が國古代人の生活					
			加藤 正明	古代	奈良時代に於ける農兵制度崩壊の一考察					
			笠原 一男	中世	眞宗教團の發展とその基礎——特に越前國河口、坪江庄を中心として——					
			1941	昭和16	12		後藤 信	中世	鎌倉時代に於ける新佛教思想——特に道元を中心として——	41年12月卒
							下出 積興	古代	上代思想史に於ける道教の問題	
庄司 三男	古代	上代の庶民生活と信仰								
須田 政明	近世	本居宣長の治世論に就いて								
長 正俊	近世	上杉藩山の研究								
永江 新三	幕末	幕末薩藩の研究——特にその國家的活動への契機に就いて——								
福田 俊雄	中世	後北条氏の民政								
松田 文人	中世	中世東國に於ける浄土宗教團の發展								
丸山 忠綱	中世	宮座の研究								
宮崎 道生	古代	奈良時代に於ける政治と佛教との關係に就いて								
八波 浩	古代	大江匡房の研究								
南波 恕一	古代	日本神話論								
後藤 信	中世	鎌倉時代に於ける新佛教の文化史的意義——特に道元の思想を中心として——								
高橋 佐門	未詳	日本民族性に於ける海洋的要素の發展								
伊藤 英造	中世	莊園鎮守社とその宮座組織の成立について								
宇野 (のち貫) 達人	中世	惣領制の發達								
小川 光男	古代	〈交替式を中心とせる〉國司交替の研究								
織田 長繁	中世	源朝廟の信仰								
岡 壽磨	古代	平安時代の貴族の生活								
金本 正之	中世	武士道史上に於ける戰國時代の位置								
唐木 邦雄	中世	鎌倉時代に於ける武家主義に就いての一考察								
木下 邦樹	中世	勅撰集の研究								
小嶋 誠	近世	東西兵學の近世に於ける日本の展開								
坂本 夏男	中世	藤原定家と承久の變								
下川 徹家	中世	〈中世商業者の座に於ける〉本座新座試論								
田中 久史	中世	初期室町幕府の對社寺本所領政策								
高橋 彦弘	近世	近世に於ける絹織物業の構造								
中村 秀夫	近世	社會教化より觀たる心學								
松本 佐一郎	幕末	鴉片戦争の我國に及ぼしたる影響								
水口 敏之	近世	江戸時代酒造業に見たる統制と商人の動向								
村上 勇	近世	林羅山の神道思想								
1942	昭和17	9	佐々木 鏡市	近代	近代陸軍の成立について	41年3月卒論				
			秋枝 徹男	近世	近世漁村形態の一考察——豆州内浦を中心として——					
			井上 光貞	古代	奈良遷都以前の社會と佛教 *副論文「元興寺縁起の成立について」					
			石本 (のち小松) 巖	中世	神皇正統記の國體思想					
			一條 元美	近世	本田利明について					
			宇野 秀彌	中世	平安末期に於ける雜藝盛行の庶民的性格について					
			内田 正美	近世	江戸時代前期の長崎警衛					
			江間 信太郎	近世	近世初期に於ける武士道					
			奥田 幡次郎	近世	享保改革期に於ける農村状態——特に加賀藩を中心として——					

卒業年	氏名	時代	卒業論文題目	備考	
1943	昭和18	9	蔵内 修治	近世 橘守部の研究	
			栗田 二郎	中世 戦國の世相と信長	
			清水 勝太郎	幕末 幕末討幕論の展開——主として寺田屋事件の思想的背景	
			篠原 亮	中世 北畠親房の神道思想に就いての一考察——特に元々集を中心として見たる——	
			嶋司 守人	中世 神皇正統記の研究	
			関 晃	古代 上代に於ける官學の學問の性格に就いて	
			大松 種藏	近世 二宮尊徳の思想及び事業	
			高瀬 泰承	中世 宗教思想史上より見たる應仁の亂	
			武部 敏夫	近世 享保改革期の經世思想	
			富来 隆	中世 中世前期に於ける「財産相續」の研究	
			西澤 寛	中世 武家法より見たる戦國時代	
			羽塚 宣正	中世 中世に於ける禪宗寺院領に就いて	
			坊城 俊孝	中世 戦國時代に於ける公卿の在國	
			山田 英雄	近世 近世初期に於ける博士家の學問——殊に清原家に就いて——	
			吉田 主税 (のち潤史)	中世 鎌倉時代に於ける宗像神社の研究——特に大宮司家と社領を中心として——	
			石川 彌佐郎	近世 寛政時代に於ける蝦夷地政策論	
			中村 和	幕末 横井小楠研究	
			山中 裕	古代 藤原道長の研究	
			荒木田 楠哉	中世 室町時代に於ける伊勢神宮	
			市丸 英二	古代 律令政治の精神	
			茨木 清	中世 室町時代の庶民生活	
			小川 常人	幕末 眞木和泉守研究	
			金尾 澄映	古代 國史に現れたる恩赦の研究	
			木下 繁	中世 江戸幕府貿易統制の一考察——特に銅及び俵物に就いて——	
			北村 芳郎	近世 近世初期に於ける對耶蘇教政策	
			佐藤 昌介	古代 天武天皇紀に現れたる神祇崇拜	
			篠山 豊	近世 近世町人意識の考察	
谷 省吾	近世 鈴木重胤の研究				
土田 寛	近世 文祿慶長の役に於ける軍政工作				
徳永 春夫	古代 奈良時代に於ける班田制の實施に就いて				
中島 (のち木本) 徹	古代 日本靈異記成立考				
中田 易直	近世 近世武士道の成立				
中村 肇	幕末 藤田東湖の尊攘思想——特に文政・天保年間に於けるその開展を主として——				
1944	昭和19	9	野口 三男	古代 古語拾遺觀の變遷	
			野田 幸三郎	古代 上代に於ける陰陽道に就いて	
			福田 芳郎	近世 近世初期に於ける博多及び博多商人の性格	
			馬島 春樹	古代 日本書紀に於ける支那思想の問題	
			前田 竹虎	幕末 幕末に於ける薩藩の實力の根柢の検討	
			松本 脩司	近世 前田綱紀の學問の志向に就いて	
			武者小路 穰	古代 上代に於ける對新羅交渉	
			村上 健藏	近世 近世交通史上の一問題——敦賀、琵琶湖間を中心として——	
			村橋 友右衛門	近世 吉田光由の塵劫記について	
			元山 俊彦	古代 最澄の圓頓戒壇建設の思想的意義	
			森岡 良夫	近世 江戸時代後期民間教化運動の一考察	
			内藤 忠治	近世 佐藤信淵の研究——特に「混同秘策」に就いて——	
			増田 宏雄	古代 王仁の後裔氏族に関する研究——歸化人に関する研究の一斑として	
			堀川 理	近世 直毘靈の研究	
			税所 莊一郎	近世 伴信友翁攷	
			柴原 定雄	古代 上代に於ける東北經營	
			柴田 甚太郎 (北彦)	中世 元亨釋書について	
			水野 清藏	古代 聖徳太子の御精神を仰ぎ奉りて	
			西山 徳	古代 祈年祭の本義	
			樋田 並滋	中世 鎌倉時代に於ける神宮御領	
			三上 嘉明	近世 近江商人意義の考察	
			元木 光雄	近世 側役人の研究	
			山口 啓二	近世 松平定信と海防	

附表 B：卒業論文 時代別

卒業年（≠年度）	総数	古代	中世	近世	幕末	近代	未詳
1905	4	4					
1906	6	1	3	2			
1907	8	1	6	1			
1908	13	7	3	2			1
1909	10	2	5	2	1		
1910	13	2	6	3	1		1
1911	8		3	5			
1912	6	2	3	1			
1913	4		2	2			
1914	7	3	3	1			
1915	9	0	7	1			1
1916	9	1	4	3	1		
1917	5	1	3	1			
1918	5		2	3			
1919	7	1	3	3			
1920	6	1	5				
1921	5	1	1	2	1		
1922	4	1	2	1			
1923	5	4	1				
1924	3	1	1				1
1925	5	1	2	2			
1926	8	2	4	2			
1927	6	2	1	3	4		
1928	12	2	4	4	1		1
1929	17	7	4	6			
1930	14	4	4	6			
1931	18	5	4	8	1		
1932	23	4	8	10	1		
1933	26	6	9	10	1		
1934	25	6	7	12			
1935	27	8	6	12	1		
1936	30	8	9	9	3	1	
1937	30	8	8	12	2		
1938	29	9	8	9	1	2	
1939	32	6	13	10	2		1
1940	26	6	6	8	5	1	
1941年3月	24	7	8	8	1		
1941年12月	20	4	9	5	1		1
1942	24	2	11	9	1	1	
1943	29	11	3	11	4		
1944	12	4	2	6			